[報告 4]

農業で夢つくり

地域の農業の担い手から JA への期待

田中小有里（有限会社ニューファーム SAYURI 取締役）

平成 18 年 4 月、有限会社ニューファーム SAYURI を設立し、滋賀県の湖北町で水稲・小麦・大豆の土地利用型農業を行っている。JA 北びわこ管内では最も経営面積が多く、内容は、水稲 52ha、小麦 30ha、大豆 30ha、水稲育苗販売 1 万 2,000 箱である。社員 4 名、あとはアルバイトで補っている。

圃場は町内 13 集落、町外 6 集落にまたがっているが、その中の 6 集落で 98%を集積している。95%が出作。大型農家と集落営農の共存共栄を目指している。

私はもともと非農家の出身であり、基本的には現在の代表取締役である木津治さんの農業を引き継ぐようなかたちで就農し、一緒に会社を設立した。血縁関係がないので継承は大変だろうと言われるが、特に問題はないと感じている。

1. JA との共存関係

肥料・農薬等の資材は、すべて JA から購入している。出荷も、全量を JA に出している。JA より資材を安く売る業者はあるし、生産物を JA より高く買ってくれる業者もいる。それでも JA とつきあっているのは、経営上、非常に有効なところがあるからだ。

まず経営の話からすると、うちの作業場は、とてもボロくて小さい。けれども、それに投資することは考えていない。私たちが販売する米は約 4,000 俵。もし仮渡金が 2,000 円下がれば 800 万円のマイナスだ。そういう不安定な状況の中で、多額の投資はできない。機械の更新は必要不可欠だが、それ以外についてはお金をかけず、合理的な経営を目指している。

もう一つ大切なのは、省力化をはかり、適材適所と上手な段取りで作業効率を向上させ、できるだけ人件費を抑えることだ。ただし、仕事は手を抜かない。たとえば、土手の管理などもきれいにするようにしている。利益を追求するばかりではなく、やはり地権者から喜ばれる仕事をしたいと考えている。

そして、そういった私たちの経営方針に、JA の存在は非常に合致している。

うちには資材を保存する場所がないので、その日に必要な分をその都度配達してもらっている。また、作業の手をとめずにすむように、昼ごはんの間や作業と作業の間の時間を指定して、そのとき必要な、あるいは足りない資材を配達してもらう。燃料も、圃場で直接コンバインに入れてもらう。すべての資材を JA から購入するかわりに、そういった対応を受けている。

コメも全量を JA に出荷しているが、メリットとしては、栽培の 65%を占めるコシヒカリについてフレコン出荷させてもらっていること。また、うちにはコメの倉庫がないので、昼までにモミすりをした分は、すぐに JA の倉庫へ入れてもらっている。

そして、購入資材、コメの売上げといった経理も JA にまかせている。

2. JA との信頼関係の上に成り立つ農業

私は、JA の職員をとても頼りにしている。営農担当者には、肥料・農薬のことからお金の問題まで、すべて相談している。その人がいるから、これから

も農業を続けて行こうと思う。そういう関係ができていることが、とても大切なのではないだろうか。

以前、夏場に社員の一人が体調を壊したときのこと。作業場には出荷しなければならない 60t のムギが山積みになっていた。しかし、大豆の播種時期でもあり、どうしても社内では手がまわらない。そんなとき、私はまず JA の職員に相談した。すると、近所の農家を集めてくれて、みんなで作業を手伝ってくれたのである。本当にありがたいと思った。JA の職員はその地域の人であり、そこで信頼関係を築くことによって、地域での作業が速やかになる。何か地域で問題が起こったときなどにも、とても力になってもらえる。

近江商人の精神として、「三方よし」というものがある。自分によくて相手にもよい、そしてさらに、地域（世間）にもよいことが大切である。農業にもその考え方を取り入れなければいけないと考えている。地域のいろいろな力が結集して、私たちの経営は成り立っている。私たちにも利益があり、JA にも利益があり、私たちがいることが地域のためにもなる。そういう会社でありたい。

田んぼで女性や若い人たちが働いていると、非常に明るい感じがする。誰もが参加できる農業であってほしいし、土地利用型農業にも女性の参画を促していただきたい。がんばっている農家はぜひ応援してあげて、地域の農業者に慕われる JA であってほしいと思っている。